
[連載中]3R

冴風あやか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「連載中」3R

【Nコード】

N8646Z

【作者名】

冴風あやか

【あらすじ】

ある日突然現れた叔母に決められた同居生活。否応なしに決められ、行ってみるけれど…
青春真っ只中の少年少女が描く恋模用。

Act・1 『桜の時』

淡いピンクの花びらが宙を舞い踊る。

風の速度に合わせ、時に早く、時にゆるりと。

散って行くことが終わりを告げることを意味していても。

悪あがきもせずに、流れに身を任せる潔さ。

公園へと続く道。

道を示すように並べられた桜の街道。

初めて歩く場所なのに、何故か懐かしくさえ感じる。

見上げると、ピンクとも白とも取れる淡い不思議な空間。

その隙間から見える空は、青く澄んでた。

少しの眩しさに顔を顰め、少年は、また歩み始めた。

桜の並木道が終わると、そこは広い公園だった。

綺麗に整備された公園は、中心に勢い良く飛沫を上げる噴水を陣取って、そこを中心にして円形に作られていた。

どうやら目的地に無事着くことができたことに、少年は安堵する。そして、今度は目的の人物を探す。

「まだ来ていないかな…？」

辺りを見渡してみるが、それらしい人物はいなかった。

仕方なく、誰も据わっていない適当なベンチを探し、腰掛ける。

肩に掛けていたスポーツバックが重い物音を立て無造作に下ろされた。

身軽になったことで、自然と息が吐き出でる。

ジーンズのポケットに手を入れ、携帯電話を取り出し、何となく

時間を確認すると、間も無く一時半が来ることを告げていた。そのまま慣れた手つきでリダイヤル画面を呼び出して確認するが、先ほど電話してから15分も経っていなかった。ぼーっと周りを見渡していると、色んな物が視界に映り、色んな音が耳に流れてくる。

楽しそうに声を立てながら遊具の隙間を駆け回る子供の姿。それを見守りながらも談笑に花を咲かす母親たち。ベンチに腰掛けて楽しそうにしているカップル。そんな人たちの姿が、のどかさを余計に引き立てていた。ふと、先ほどの電話を思い出す。自分から掛けて置いておかしい話だが、初めて聞く声だった。

『はい、葉月です』

駅から掛けた電話は、たった二回のコールで取られた。あまりの早さに少し驚いてしまい、すぐに声が出なかった。葉月と名乗ったのを聞いて、掛けた相手が間違いではないことは分かる。

女性の声だった。

落ち着いていて、凜とした澄んだ声。

先方に同じ年の女の子がいると聞いていたのを思い出したので、きつとそうなのだろう。

『…もしもし？』

何も云わない相手を不振に思ったのか、念を押して尋ね掛けられた。

『あ、はい…中込悠羅ですけど…』

間の抜けた返事だと思う。

けれど、元々電話の苦手な少年にはそれ以外にどう切り出せば良いのかすぐには分からなかった。

『…駅に御着きになれましたか？』

名前を出したことで気づいてくれたのか、相手は話を続けてきた。

ほっとする。

きつと、バックの賑やかな人の出す音やホームのアナウンスなどが電話を通して相手に届いているのであろう。

『はい、そうです…。すみません…予定より一時間早く着いてしまつて…』

『…分かりました。すぐにお迎えに上がりたいところなのですが、今すぐは無理のようなので…もしよろしければ、近くまでおいで頂けますか？』

『はい、大丈夫です…お願いします』

『では、まずそこをまずすぐに出られます…』

説明してくれる道筋を周りを見て検討立てながら覚えようとする。『…です。後はそちらの公園でお待ちいただければすぐにお迎えに上がりますので…よろしいでしょうか？』

『はい…お願いします』

用件を云い終え、こちらが理解したのを確認すると、お待ちしておりますと言う声を最後に、電話は終話された。

用件だけの電話と言うのは、こういうことをいうのだろう。

少し迷ったところもあったけれど、それでも15分くらいでここに辿り着けたので、まあ、初めての場所に来るにしては早かった方だと思ふことにする。

そんな事を考えながらぼーっとしていると、誰かがまた公園内に入ってきた。

同じ年くらいの女の子だった。

きよろきよろとしきりに辺りを見回して、誰かを探している様子。ぼーっとしていて忘れていたが、そういえば自分も人と待ち合わせをしていたのだ。

もしかしたらと思い、はっとして見ていると、どうやら相手もそれに気づいたようで、慌しく近寄ってきた。

目の前まで駆けてくると、軽く上がった息を落ち着けるように、

少し前屈みに胸を抑えながら尋ねてきた。

「あつ、あの…悠羅さん…ですか…？」

ベンチに座っているため、少女の顔の位置の方が高かったので、見上げる形になる。

「はい、そうですけど…？」

なんとなく腑に落ちないのは、先ほど電話した相手の声とは違っていたからだ。

電話だからだったのだろうか。

でも、自分の名前を呼んだし間違いはないようではあるが…

「よかったあ…会えて…！」

安心したように笑って体制を直す。

青いアンサンブルになった上着と、裾に刺繍の入ったデニムのスカートに紺の靴下。

足元のスニーカーの結び目が解け掛けていた。

よほど急いで来てくれたのだろうか。

「ごめんね、遅くなって…」

すまなそうに謝って来る少女。

「いえ、こっちが早く着すぎたから…すみません」

そういうと、少し嬉しそうにして自分を見てきた。

「迷わなかった？」

「はい…一本道のようなものでしたし…」

「そっか、よかったあ。わたし、ちょっと家にいなくてね、携帯に電話貰って飛んで来ちゃった」

「すみません…」

悪いことをしたと、素直に謝ると、首を振ってそんなことはないのだと云ってくれる。

「わたしが会うの楽しみにしてたから急いで来たんだよー？」

そう笑う目の前の少女に、自分も少し緊張が緩む。

そういえば、急いで連絡を貰ったと云っていたけれど…

先ほどの電話はこの少女の声ではないのだろうか。

じゃあ、誰が…？

そんなことを考えていると「じゃあ、行こっか？」と、荷物を持ち上げようとしながら声が掛かった。

どうやら、自分の荷物を持つとうとしてくれているらしい。

「いえ、自分で持ちますから…」
慌てて持ち直す。

「そう？疲れてそうだし、わたし持つよ？」

「いえ…悪いですから…」

そういうと、少し拗ねた様に窘められた。

「今日から一緒に住むんだから、遠慮しないのっ」

どう返していいか分からず、苦笑する。

ゆっくりと、喋りながらその公園を後にし、また、あの桜の下を通った。

名前を尋ねると、少女は、玲奈と名乗った。

そのとき少し寂しそうに笑ったのが気になったが、すぐに戻ったので何も云わずにおいた。

彼女は、間違いなく自分の叔母に当る人物の娘らしいので、従姉になる。

「ここから、家は五分くらいなの」

そっついながら嬉しそうに少し先を歩きながら、付いて来ていることを確認するように、たまに振り返る。

「桜、綺麗でしょー。ここは結構雪振るから桜前線は遅いほうなんだけどね、今年は早かったみたい」

「そうなんですか…」

同じように桜を見上げてみる。

そして、ふと視線を戻すと、玲奈は自分の方を見ていた。

「…？」

「…あつ、ごめんね」

玲奈は自分が見入っていた事に気づき慌てて目を逸らす。

「う、ううん…何かついてる…？」

「違う違う、そんなのじゃないよ」

「…？」

「ごめんね、ほら、悠…羅くんは覚えてないかもしれないけど、わたしは小さい頃何度か遊んだ記憶があるからね、随分変わったな！
って思つて。でも、もう十年以上前だし、変わって当たり前なんだ
よね」

「会ったことあるの？」

「やっぱり…覚えてないんだ？」

寂しそうな笑い顔。

先ほどの名乗ったときのあの顔を思い出す。

「ごめん…」

「あ、謝ることじゃないよ。気にしないで。さ、家ももうすぐそこだから」

「う、うん…」

そう言つて誤魔化すように腕をぐいつと引いたかと思うと少し掛け出され、思わず体制を崩すが、何とか持ち直し付いていく。

曲がり角を曲がると、大きな家が見えて、そこで玲奈は止まった。
洋館…と言えるかも知れない。一般住宅と言ふよりも、洋館と言つたほうがしっくりとくる大きさだ。

「…ここ？」

気後れしながら尋ねると、嬉しそうに二つ返事が返ってくる。

「ほら、入って入って？」

引つ張られ、玄関に辿り着く。

開かれた玄関の中は、予想通り広かった。

玄関から長めの廊下や、いくつかの部屋の扉や階段が見える。

そして、何より驚いたのは、すぐ目の前にまるで自分たちを待つように立っていた人物の存在だ。

金髪碧眼。まるでフランス人形のような女性。

「お帰りなさいませ」

軽く頭を下げて出迎えるその人は、先ほど電話に出てくれた人と同じ声をしていた。

より鮮明な、はっきりとした声。

「ただいま、ユウナさん。悠羅くん連れて来たよ」

そう言われて、ユウナと呼ばれた人物は、自分の方に視線を向けてきた。

瞬間、その青い瞳と目があう。

「ユウナさんはね、うちのメイドさんなんだよ」
横で玲奈に説明された。

このご時世にと思うかもしれないが、実際の屋敷を見た後だから、メイドの一人や二人いてもおかしくはないと納得する。

「えと、初めまして…今日からお世話になります」

「……初めまして。ユウナと申します。悠羅様」

名前を様付けで呼ばれたことのなかった悠羅はくすぐったさを覚える。

「あの…悠羅でいいです…よ…」

「いえ、私はメイドですから」

はつきりと引かれた一線をそこに感じた。

「ユウナさん、強情だから…」

苦笑交じりに玲奈が悠羅に声を掛ける。

「…」

無表情な彼女からは、感情が読み取れない。

怒っているのだろうか…？

「ほら、ユウナさん、笑って笑って。ユウナさんに睨まれて、悠羅くんびつくりしてるよ？」

くすくす笑いながらそう玲奈がそう諭すと、ユウナが少し顔を赤

らめた。

「に、睨んでなんかいません…っ！」

不機嫌なのではなく、感情を出すのが苦手なのだ。

それに気づくと、安心した。「ユウナさんも、悠羅くんに会えるの楽しみにしてたんだよ、ね？」

わざと玲奈がそういうと、ユウナの顔が益々赤くなった。

「わ、私はメイドとして…」

「はいはい、照れないの」

「玲奈様っ！」

完全に玲奈のペースで遊ばれているユウナを見て、悠羅は笑ってしまう。

「ほら、悠羅くん笑ってるよ？」

「……」

笑い顔の玲奈にそう言われ、まだ赤い顔で少しむうつとして自分を見てくるユウナ。

だが、先ほどとは違い、それが可愛くさえ見える。

「立ち話も何だし上がるうー」

玲奈はそう言っただけに靴を脱いで上がると、スリッパを履いた。

「さ、悠羅くんも」

どうぞ、と促され「あ、お邪魔します…」というと、こらっと怒られた。

「ここは、今日から悠羅くんのお家なの。家に帰ったらまず『ただいま』でしょ？」

「え…」

「ほら」

妙に恥ずかしさを感じるが、二人の目に負けて素直に口にする。

「ただいま…？」

そんな様子に満足したのか、玲奈とユウナが顔を合わせ笑い合ってから答える。

「おかえりなさい、悠羅くん」

「おかえりなさいませ、悠羅様」

Act・1 『桜の時』（後書き）

* Character

- A 中込悠羅（15）：主人公、高1。玲奈の従弟。クラスは1

- A 葉月玲奈（15）：悠羅の従姉。同居先の住人。クラスは1

ユウナ（??）：葉月家のメイドさん。謎の多いひと。

堀江紗枝（15）：玲奈の小学校時代からの友達。クラスは

1 - A

- A 荻原歩美（15）：紗枝の中学時代からの友達。クラスは1

河口隆志（15）：悠羅の押し掛け友達。1 - Bで隣のクラス。
ス。

Act・2 『嵐のような人』

「…悠羅様。悠羅様」

遠くから声がする。

重い瞼を開くと、そこには青い瞳があった。

「…！？」

あまりの驚きに、思考が一気に覚醒する。

同時に跳ね起きた。

「ユ、ユウナさん…？」

「おはようございます。悠羅様」

驚いている悠羅とは対照的に、落ち着いるその声の主は、淡々と朝の挨拶から始めた。

「おはよう…って何でここに…」

「それは、悠羅様。そろそろ悠羅様を起こすよう、玲奈様が言われたからです」

「そ、そう…」

「勝手に入ってしまい申し訳ありません。何度も外から声を掛けさせて頂いたのですが、一向にお返事がなかったのです…」

流石に勝手に部屋に入っただのはまずかったと思ったのか、すまなそうに謝る。

「う、ううん、いいよ…ありがとうございます…」

時計を見た。

春休みも終わり、これから三年間通う高校の入学式が今日ある。

「内線の子機をお持ちしましたので、今日からこれを枕元に置いておいて下さい。番号はこちらに…」

差し出された子機と充電器を悠羅が受け取るのを確認すると、ユウナは一礼して部屋を出て行った。

「お支度が整いましたら、居間にお越し下さい。」

それを確認してから、悠羅は一息ついた。
朝から驚かされる。

今までとはまったく違う生活に。

こうやって、朝起きて、誰かの顔を最後にみたのは、いったいどれくらい前だろうか。

それさえも思い出せない。

ずっと、一人で生活していたのだから。いや、一人と言うと語弊がある。

実際は、父親と二人暮らしだった。

とはいっても、お互いに顔を合わすことも珍しく、一カ月に一回顔を合わせば良い方で、でもそれは別に仲がいいとか、悪いとかではなく、ただ、職業的に父親は忙しく、自分と生活リズムが違っていたからだ。

それに、父はことは別の家も持っていた。

母親のことは分らない。父も何も言わなかった。

自分から聞こうともしなかった。

週に三回、お手伝いさんの来てくれる生活に不便はないし、それでいいと思っていた。

だから、こうやって誰かに起こされることなんて、思いもよらなくて、今朝はびっくりした。

ここに来たのは、叔母に誘われたからだ。

三ヶ月前、ある日、突然現れた叔母はこう言った。

『お久しぶり、悠くん？』

悠くん。

久しぶり話す甥にも気さくな叔母。

久しぶりとはいっても、俺にその記憶はないから、ほぼ初対面に近い。

向こうは自分のことを良く知っているようではあるが。

彼女は、父の姉とは思えないほど、陽気な人だった。

いや、実際自分の父親とろくに話すことすらない自分には、父がどういった人かも、父の”見せている”表面しか知らない。
『うーん、達也の若い頃そっくりね。良い男になるわよー』
そう言っただけ笑う叔母。

自分の弟を良い男と認めているらしい。

『達也は、相変わらずブラウン管の中で忙しいようね…』
苦笑交じりに呟くと、申し訳なさそうに自分を見てきた。
どうして叔母がこんな表情をするのかは分からなかった。

『そうですね…』

俺は、点いていないテレビを見た。

そこは、家にいない父の姿を良く映している。
会うことはなくても、そこで父を一方的に見ることは出来た。
父は俳優で、人気も高かった。

その反面、プライベートは謎で、きっと俺が達也の子供だと言うことを知っているのは、この叔母くらいなのだと思う。

『それでね、悠くん。今日は悠くんに用があつて来たの』

『はい…？』

『悠くんさえ良かったら、家で住まない？』

そんなことをさらっと口にして、叔母は目の前にある熱い珈琲に口付けた。

『あら、この珈琲美味しいわ。悠くん淹れるの上手いわねー』
どうやら、マイペースな人らしい。

本当に父の姉なのだろうかと思ってしまう。

『私は間違いない達也の姉よ？』

人の心境を読むのが上手いらしい。

絶句している俺を、楽しそうに見ている。

『悠くん、次高校生でしょ？』

『あ、はい…』

いきなりの質問に一瞬身体がびくつとなった。
この人と話しているとペースが乱される…。

『それで、よかったらこっこの高校受けて、春から一緒に住まないかなって思って』

『思ってたって…いきなり…』

『嫌かしら？』

『いえ、嫌と言うわけじゃなくて…』

『高校もう決めてるの？』

『いえ…』

決めていなかった。

特に行きたいところもしたいこともないし、進学しようかさえ悩んでいたところだ。

『こっちにね、良い高校があるのよ、良かったらそこ受けて見ない？』

『いえ、そんな急に…』

『あら、悠くん成績悪くないでしょ？』

『悪くはないですけど…』

『じゃあ、大丈夫よ。うちの娘…あ、家にも悠くんと同い年の娘がいてね、その子がこれがまた誰に似たのか英語が苦手ね。そのせいで今ひいひい言いながら塾通いしててねー馬鹿よねー』

『あの…』

『ああ、それはどうでも良い話ね。で、その娘が行く高校がね、良い高校なのよ。あなたのお父さんも、私も通った学校よ。去年、改築が完成してね、かなり綺麗になってるわよー。羨ましいわ。で、あなたさえよかったら是非その学校を勧めたいの』

『…は、はあ』

『一度受験してみましようよ、これ。パンフレット。一応目を通してね？』

そう言って、その日は叔母はそのまま帰った。

その後は嵐が去ったようだった。

その時のことを思い出して苦笑する。

その後、極め付けがあつた。

願書締め切り三日前、叔母はまた俺の前に現れたのだ。

『悠く〜ん?』

『は、はい…』

また、何故か家に入れてしまったのだ。

そしてまた後悔する。

どうやら氣に言つたらしい俺の淹れた珈琲に口付けながら目を細め睨んできた。

そして

『…豆変えた?』

『……』

『私、前の方が良かったわ』

何てことを口にする。

『つてそうじゃなくて、願書、出してないでしょ?』

『う…何でそれを…』

『叔母さんに知らないことなんてないのよ』

そう叔母は言い切つた。その言葉に何故か納得してしまう。

『で、パンフレットは見たの?』

『はい…』

『どうだつた?』

珈琲を啜りながら叔母が尋ねてくる。

パンフレットは確かに目を通した。

綺麗な校舎。良さそうな校風。

この辺りにある高校より良いと思った。

『嫌かしら?』

『いえ、嫌と言うわけでは…』

本当だつた。実際、その学校には惹かれる部分があつたから。だが、話は別にある。

叔母の世話になるということだ。

叔母には叔母の家庭がある。

それを邪魔することが悪いと思った。

そんな俺の心中を察したのか、叔母が再度口を開く。

『家の事ならいいのよ？家の家は達也の家でもあるんだし』

『……』

『元々、あの家は達也に相続の権利があつたのよ。でも、達也が住む気がないみたいだし、私たちが住んでるだけ。ってわけで、決定ね』

『は…？』

どういうわけなのだろうと思うが、叔母は有無を言わせぬ態度でこう言った。

『さ、今すぐ願書、書きなさい』

俺にとって、叔母の印象は強烈だったのだ。

だから、ここに来るときも、内心どんな生活が待っているのだろうとびくびくしていた。

それが、だ。

ここに来て、叔母は居なかった。

居たのは、従姉妹の玲奈と、メイドのユウナだけだったのだ。

「あはは、お母さんね、お父さんの単身赴任に付いて遺跡堀いっちやったー」

あっけらかんとそう言う玲奈の言葉に、俺は絶句した。

「帰って来られるのは当然先かと思えます…何せ行き先が分からないもので…」

ユウナまでそんなことを言い出したのだ。

とたん、家の電話が鳴り出す。

ユウナが慌てて受話すると、相手と2、3言話し、すぐにこちらに受話器を持ってきた。

「え…？」

「玲香様です」

ユウナの言葉にまた驚く。

あの人は、本当に不思議な能力でもあるのではないかと思った。

「もし、もし…?」

「あ、悠くん?」

ごく自然に切り出す。

「ごめんねー、急に。びつくりした?」

びつくりしない人はいないと思う。

そう心の中で呟く。

「うーん、そうよねえ」

「…!?」

「まあ、私もびつくりしたのよ。いきなりでねえ」

嘘だ、絶対嘘だ。

この楽しそうな声が全てを語っている。

「ま、そういうことで、うちの玲奈よろしくね、そのうち飽きたら帰るから」

がちやつ、つーつー…

後に残されたのは虚しい音だけだった。

今思い出しても強烈な人だと思う。

嫌ではなかった。

今までの平凡な生活とは違ったから、戸惑いはあったが、残りの春休みを過ごしたここでの生活は、前の一人での生活よりも楽しかった。

そんなことを思い出しながら、身支度を整える。

上着を羽織ったとき、真新しい制服の匂いが広がった。

居間に着くと、玲奈が座ってお味噌汁を啜っていた。

葉月家の朝は朝は和食と決まっているらしい。

お味噌汁と焼き魚の良い香りがしていた。

「あ、ゆんゆんおはよー、先に食べてるよー?」

「うん、おはよう」

”ゆんゆん”それは、玲奈が俺に付けた愛称だった。初めは抵抗があったものの今ではすっかり慣れた。

そして、この数日で、俺も”玲奈”と呼ぶ事に慣れた。

初めてあったイトコと言っても同じ年、気軽に呼び合うほうが良いに決まっている。

「おはようございます、お食事をどうぞ」

後からやってきたユウナさんが、俺の分の食事を運んでくれる。

こうやって、朝から美味しい食事が用意される生活は、嬉しいものだ。

席に着いて、食事を口に運ぶ。

うん、今日も美味しい。

「それにしても、ゆんゆん朝弱いねー？」

「う…」

「私も朝からあんなに声を出すの苦しかったです…」

「う…」

「玲奈だって春休み中は昼過ぎに起きてただろ…？」

反撃を開始すると、今度は玲奈が口籠る。

「う…」

そう、玲奈が今日早かったのは、単に入学式、いつもと違った日が楽しみだったからなのである。

普段は悠羅と同じ、自分では起きられない人種だ。

いや、悠羅よりも玲奈の方が数段上だった。

「お二人とも、もう高校生になられたのですから、もっと御自分で責任持つてくださいね」

そうユウナに窘められ、二人は声を揃えて返事をした。

「それはそうと、悠羅様」

「うん？」

悠羅は魚の小骨を取り除きながら、顔だけユウナに向けた。

「今朝、魔されていたようでしたが、大丈夫ですか？」

「あー、うん。」

「んー、夢で魘されてたの？」

「うーん。多分色々見てるんだろうけど、起きたときには少ししか覚えてない何か昔からたまに見る夢があって」

「ふーん？」

玲奈が橋を口に咥えながら興味深そうに聞いている。

いつもなら、そんな玲奈を行儀が悪いと叱るユウナだが、今日は違っていた。

「昔からですか…？」

「うーん？うん」

昔から…

でも、最近良く見るなと思う。

「どんな」

珍しくユウナが深く尋ねようとしたとき、玲奈が叫んだ。

「あっ！」

「ど、どうした？」

悠羅の意識がそっちに集中する。

「にゅ、入学式の時間間違えてた！集合九時じゃなくて八時半…！」

「！？」

「ゆ、ゆんゆん、急いで…！」
食べかけの食事を恨めしく見ながらも、即座にカバンを持って家を出なければ行けなくなった。

「何で確認しないのっ！」

「じゃあなんでゆんゆんも見とかなかったの！」

「うっうっうっ」

「ってこんなこと言ってる場合じゃないでしょ！」

「そ、そうだな」

どたばたと、玄関に走る。

振り返り、見送りに出てくれているユウナさんに「行って来ます！」と叫ぶと、二人は一斉に飛び出した。

後に残されたユウナさんが苦笑交じりに溜息を付きながら後を見送った。

「いつてらっしやいませ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8646z/>

[連載中]3R

2011年12月27日21時49分発行